を考えると、やめた方が良いだろうと思うようになった。そして一番現実的な選択肢として、大学時代までは教師を目指して教職課程も履修していた。しかし、採用試験が高倍率のためにそれも断念し、民間の学習塾に就職した。その後幾つかの職業を経験し、現在の私は事務職の派遣社員として、製造メーカーで働いている。家に帰れば家族の食事の準備等の家事をこなし、休日はみんなで買い物等に行く。このような私の生活は穏やかだが平々凡々とした人生に見えるであろう。しかし、私はこの他にも色色な人生を経験しているのである。

その他の人生を経験させてくれているのは他でもない「読書の世界」である。「小説が書かれ読まれるのは、人生がただ一度であることへの抗議からだと思」うと作家の北村薫さんが述べているように、私は一度きりの人生では物足りず、読書によって他の人生を生きてみたいと抵抗しているのかもしれない。確かに人生は一度きり。そして私たちはその一度きりの人生を精一杯生きている。だが、私は時々本を読み、作中の登場人物になり切って思考したり、頭の中で行動したりして別の人生を生きてみている。すると、医者や刑事や教師や、その他憧れていた職業に実際に就けなくても、本の中ならその憧れの職業に就き、その苦労も、やりがいも疑似体験することができる。

さらに本の中なら、老若男女誰にでもなれ、古今東西自分と全く縁のない人生に飛びこむこともできる。こうして私は一つ、また一つと別の人生を生きることができる。その中で喜び、悲しみ、怒り、そして苦しみ等の幾つもの気もちも登場人物に感情移入し体験できる。そのようにたくさんの人の人生を経験すると、その分他人の気持ちも分かるようになってくる。そうなると、現実の世界でも他人の心情を推し量れるようになり、他人への思いやりが生まれる。そうして私は優しい人間になれる。ここに読書をするということの大きな意義があるのではないかと私は思う。

語彙力を増やしたり、筋道を立てて物事を考えるトレーニングをしたりできるのも、もちろん読書によって効果があるであろう。学生時代の私はそれらの目的で読書に勤しんできた。しかし、自分が大人になり、かつ、世の中が大きく変化している現在、読書の意義は、「たくさんの人の人生を通じてたくさんの気持ちを体験し、優しい人になれる」ことにあるのではないだろうかと私は思う。

『空飛ぶ馬』（北村薫、東京創元社、一九八九）

《一般成人の部》優秀賞

説明不可能な関係

上田　利栄子

無人島に行きたくはないが、もし行ったら、まず思い出すのはきっと夫のことだろう。我が家は二人暮らしで、今はコロナ禍でもあるので、仕事以外の時間はほとんど一緒に過ごしている。同じご飯を食べ、同じテレビを見て、同じ時間に寝て、そのうち同化してしまうのではないかと思うくらいだ。そんな相棒が横にいないとなれば、自分の一部が欠落したようで淋しいかもしれない。

気持ちを紛らわす為に、江國香織さんの『いくつもの週末』を持って行きたい。著者自身の結婚生活をつづったエッセイ集だ。著者のエピソードを読むと、自分の結婚生活が次々と思い起こされる。違う視点を得て、些細な思い出も面白いなあと思えるのだ。それが楽しくて繰り返し読んでいるのだが、きっとこの本があれば、随分と時間を潰せるだろう。

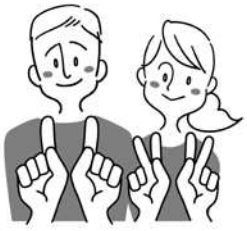
『いくつもの週末』にこんなエピソードが書かれている。著者の夫は極度のめんどうくさがりで、お風呂を億劫がるので、著者が「お風呂に入るまで（ダブル）ベッドに入ってこないで」と言ったところ、夫は居間で寝ることになった。ところが、結局淋しくなって隣に自分の枕を置いて、夫にぴったりくっついて朝まで寝たという話だ。夫婦でなければ全く理解できない。お風呂に入らない人を嫌だと思いながら、一緒にいたいと思うなんて矛盾している。夫婦って面白いなあと思う。そして自分達も、他人には理解できないであろうエピソードだらけのことに気づかされる。

ある朝、夫がこんがり焼けたパンを食べているとパン屑がパラパラとテーブルに落ちた。すると、夫はぱっぱと手で床に払い落したのだった。思わず「えー!?　ここは外じゃないよ」と声をあげた。夫はばつが悪そうにして、動きを止めた。その様子が子供みたいに見えてつい笑ってしまった。夫の無頓着さに開放的な気持ちにさえなった。このことを友人に話すと「信じられない。誰が掃除するの？」と驚かれる。夫の様子や発想が面白いと思ったのに他人には伝わらないのだ。確かにこれが夫以外だったら、腹を立てたかもしれない。夫婦間の感情は筋が通らず、説明することは不可能だ。だから、一人で思い出して笑っている。床に落としたらどんな気持ちになるだろうと想像しながら。

無人島で一人淋しくなったら『いくつもの週末』を読みながら、夫のことを思い出そう。テレビのニュースキャスターが挨拶する時に、夫が一礼することや、冬のパジャマがどこにしまってあるか分からず、半袖のまましばらく寒さに耐えていたことなど、忘れていた記憶を掘り起こして楽しませてくれるだろう。

でも、どんなに夫を思ったところで、夫はカップラーメンを食べ、テレビを独占して一人の生活を満喫しているかもしれない。ちょっとくらい私のことを思い出してよと腹を立てながら、楽しんでくれていたら嬉しいと思うのが、夫婦の不思議なところである。

『いくつもの週末』（江國香織、世界文化社、一九九七）



＊＊＊ 審査講評 ＊＊＊

本当の声を聴きたい

国府正昭

このコンクールの審査をやらせてもらって十年になる。今年はコロナの緊急事態宣言に伴う臨時休館などもあって影響を心配したが、昨年並みの応募があり、まずはホッとした。しかし、率直に言えば、内容的には一般の部を除いてはやや低調な印象を持った。団体での応募の中で、連続した前後の人が同じ本について書いていたが、一つの段落の十行弱が全く同じであった。二人とも解説か何かを引き写したのか、それとも一人がもう一人のものを写したのか、経緯は知るよしもないが、いずれにせよ心寂しい事だった。

自分が本当に感じた事や考えた事を自分の心から出た文章で書かなくてはいけない……私は十年間同じことを繰り返し言ってきた気がする。もし、何も感じなかったのなら、いっそ無理に書かない方が良い。また、〝形式〟などにとらわれてはいけない。小中学生の「エッセイ」が読書感想文的になるのは無理からぬところだが、それにしても、「私は○○という本を読みました」「選んだ理由は……」「一番心に残ったのは……」「二番目は……」と書き進めていく〝定型文〟のような感想文の何と多いことか。そんな手垢のついたパターンで、おもしろいものが生まれるはずがない。自分の印象や考えをズバリと書いてほしい。

小言はそれくらいにして個々の評だが、一般の部は読んでいて「なるほど」と思う作がいくつもある。その中で小林慎平さんの作が抜群だと思った。長期の休みがとれた、感染症対策で無人島へ行くことにした、その島は二冊以上の本を持ち込むと祟りがある……この書き出し四行で魅了される。課題を完全に咀嚼し自分で物語化している。最後にはヒネリも入っている。この発想の自由さやウィットは大いに参考にされるべきものだと思う。高校生の奥村匠登さんの作には明快な主張があったし、横山美菜さんの作には体験が書き込まれているし、上田利栄子さんの作には巧まざるユーモアがあった。

中学生の中では、芦原あかりさんの作を最優秀賞とした。本の内容と祖母の死を重ねて綴っていく手法に共感を覚えた。佐藤陽さんの作は楽しいし、川田琥太郎さんの作ははっきりした主張がある。坂倉朱里さんはちゃんと読み手を意識して書いている。

小学生の部の最優秀作は佐野雫さん。三年生とは思えないしっかりした字で自分の考えをはっきりと書いていた。横山智さんの作はおもしろい書き出しで微笑ましい。福井美晴さんも、自分の思ったことからズバリと書き出している。竹野遙人さんの作は、カラスの子を保護した体験と絡めているのが興味を引く。

小学生の部・中学生の部の入選作を改めて見ると、いずれも前述の〝定型文〟とは全くかけ離れた自由な文章だと気づく。選外となった人たちは、そこを十分に考えて、来年に再挑戦してほしいと思う。私たちが読みたいのは、あなたの本当の声なのだから。

本の力

中山みどり

私自身、書店に行く機会が増えましたが、無人島でもコロナの「お家時間」の中でも、本は大きな力を発揮するようですね。

小学生で最優秀賞になった佐野雫さんは主人公とともに、元気いっぱい無人島の冒険を楽しんでいました。横山智くんも図鑑を持って、無人島で魚や虫の探検、読み手に感動が伝わってきます。竹野遙人くんも福井美晴さんも無人島ではありませんが、大切なことを本を通して学びとっていました。

中学生で最優秀賞に選ばれたのは芦原あかりさんでした。読みながら感動を抑えきれませんでした。本の筆者と同じ悲しみを共有した芦原さんは新たな開眼をするのです。

佐藤陽くんは文章の最後がよかったですね。これで入選がきまったかも。川田琥太郎くんはあこがれる無人島生活を生きる方法や勇気を語っていましたね。坂倉朱里さんは本に誘われていくタイトルや表紙の絵の大切さに触れていて、ユニークでした。

いつも私は小、中学生の純粋なまなざしに感動しています。今回、入選しなかった人たちの中にも、充実した作品がありました。小学生の樋口連くんも力作でしたよ。中学生になる次年度を期待しています。

一般成人の部では最優秀賞に小林慎平さんを選びました。冒頭に「仕事で長期の休みが取れた」ので、感染症を避けて無人島で過ごすことにしたとありますが、これは企業戦士の願いであることに気づき、感動しました。奥村匠登さんは高校生ですが、スマホの使えない無人島での生活を想定しているところが、一つの現代批評になっていました。横山美菜さんは医者や刑事や教師になりたかった自分自身の思いから、一度きりの人生をいかに生きるかというテーマに取り組んでいました。上田利栄子さんは無人島には行きたくないが、行ったとしたら夫のことを思い出すという、実に心和ませるユーモアなエッセイですね。

選をしながら、小、中学生からは、生き生きした力をもらうような気がしています。たとえば、無人島で図鑑をたよりに虫探しをする小学二年生の、ひらがなの多いエッセイからも、ふしぎな力が伝わってきます。

また、一般成人のエッセイからは英知を学びとっています。入選にならなくても、沢山のエッセイに得点がありました。長年、応募を重ねている人には、再会の思いがあり、新しい書き手には今後を期待する思いです。

私の持論は優等生の文章でなくてもいいと思っています。誤字の多いものや段落のないのはいけませんが、読書で得た感動をぜひ伝えてください。私は、エッセイに誘われて、該当の本をさがしたこともありましたよ。

次年度を待ってます。

読書に関するエッセー
入賞作品集　二〇二一
令和三年十二月発行
発行　四日市市教育委員会
編集　四日市市立図書館